

金融政策, 金融システムショックと銀行貸出

早稲田大学大学院 大熊 正哲

《報告要旨》

バンクレンディング・ビューでは, 資産規模の小さな銀行ほど保有する流動性資産と貸出のあいだに正の相関があり, それは金融引き締め期に強まるとされる. 本稿では銀行レベルのマイクロデータを用いて, 日本におけるこの仮説の妥当性を実証的に検証する. また大規模金融機関の破綻に象徴される 90 年代後半の金融システムショックが, 銀行貸出を通じた波及チャネルに与えた影響について考察する.

本稿の主なファインディングは次の 3 点である. 第 1 に, 銀行が保有する流動性資産と貸出のあいだには正の相関があり, それは金融引き締め期に強まる傾向がある. ただしこの結果は頑健ではなく, 選択する金融政策指標や期間に依存する. 第 2 に金融自由化以後, バンクレンディング・チャネルが弱まったとの証左は得られない. 第 3 に, 金融システムショックは銀行が直面する外部資金プレミアムの上昇を通じて, 貸出に対する流動性制約の度合いを強める. これにより 90 年代における金融政策の有効性低下の原因のひとつとして, 金融システムショックが流動性の低い銀行の貸出を抑制した可能性が示唆される.

キーワード : レンディング・ビュー, 金融政策の非対称性, ミクロデータ